

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 金山浩司

### 序

本論文は、序論、9つの章、結論、付録からなる。序論では、本論文で取り上げられる課題についての研究史が概観されるとともに、本論文において新たに論じられる問題が整理される。第1章では、議論の前提となるマルクス主義的科学観とそのロシア・ソヴィエト連邦における展開が紹介され、第2章では本論文の舞台の前史ともいえるべき1920年代の様相が解説される。以下、第3章から第8章までは、雑誌『マルクス主義の旗の下に』における物理学と哲学をめぐる論争の詳細な分析が、論者たちの書簡等の資料の検討とともに展開され、第9章では第二次大戦およびその後の状況が紹介されている。

本論文以前にも、ソヴィエト連邦において、1930年代を中心に物理学者と哲学者の間で論争が生じていたことは知られていたが、研究者の多くは、この論争を、相対性理論・量子力学等の新しい物理学に違和感を覚える論者たちと、20世紀初頭、特に1920年代後半より世界的に広がっていった新たな形態・理論に基づく物理学研究を擁護しようとする物理学者たちの間の角逐と見なしており、特に物理学者たちがどのようにして新たな研究を守りながら進めていくことに成功したかを記述する点に主たる関心が寄せられていた。これに対し、金山氏は、論争の舞台となった『マルクス主義の旗の下に』誌に掲載された諸論考、および論者たちの書簡等を精密に読み込むことにより、以下の諸点を明らかにすることに成功した。第一に、この論争が新しい物理学の拒絶・受容を主要な論点としてなされたものではなく、マルクス・エンゲルス・レーニンの科学観を受け継ぎつつ新たな物理学の潮流に対応しようとした試みとして理解できること。第二に、その試みの成果は、ソヴィエト連邦の影響圏においてのみ共有されるものではあったが、20世紀の科学観の展開を論ずる際には語り落とすことのできない水準に達していると評価できること。第三に、11年間（1930年から1941年）という比較的短い期間における論争にも、当時のソヴィエト連邦の科学者たちを取り巻く政治的・社会的環境の急激な変化の影響が色濃く反映されていること、特に論争の終焉は粛清等の拡大を懸念する当事者たちの歩み寄りによるものと理解されうること。

本論文の審査においては、一次資料の詳細な調査に基づいて論争の内容に分析を加えた点、特に検討対象となった論争は、これを、科学に無知なイデオログと新たな研究を模索する物理学者の間の対立と見なす図式によっては理解できないことを明らかにした点が高く評価された。また、相対性理論・量子力学の登場によって生じた20世紀の物理学における変革を考察する際に、無視できない材料を提供する研究であるとの評価もなされた。

今後の課題としては、以下の点が指摘された。論争の中でも、主軸となった論点とそうでない論点があるが、各論点の重みの違いについても整理がされるとよいのではないかと。また、たとえばそれ以前の物理学の歴史の流れからみて重要な論点を強調する、20世紀の科学観としての特徴を取り上げる、あるいは量子力学の登場後に世界的に生じた物理学の変革の一環として整理するといった工夫もあり得たのではないかと。科学において生ずる論争一般につい

ての先行研究を参照し、論争の研究として整理することも可能であったのではないか。特に同時期のルイセンコ問題などとの比較も可能であったのではないか。政治的・社会的分析については、さらに検討の余地があり、特に、論争の内容に、論争外のどのような具体的な事情が影響を及ぼしたかについては、人事・予算等の資料をも参照した研究により分析を深めることが可能ではないか。

以上のような指摘は、しかし、本論文によって当該課題の再検討の要が明らかにされたために初めてなしうるものであることは明らかであり、審査委員会もその作業のために費やされた金山氏の労力を高く評価した。

なお、本論文の一部は、査読付きの学術誌に4つの論文として掲載されている。

## 結び

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。